

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 斐芝嘉和

挿絵 ピエール☆よしお



登場人物紹介

Characters



かとりしょうこ
鹿取 祥子

此花家に遣える使用人、桜の専属メイド。どんなときも冷静沈着で決して表情を崩さない。



このはな さくら
此花 桜

大地主「此花家」のお嬢様。想像も付かないほどの箱入り娘として育てられた女の子。横暴な言葉遣いだが悪気はない。



このはな かえで

此花 楓

桜と椿の母親。椿と同年代に見えるほど若い外見。椿と一緒に、両刀遣いで淫乱系。

ふじわら よしひと
藤原 由仁

本編の主人公。少女に見間違えられるほどの美少年。貧乏大学生で、自ら学費を稼ぐためバイトを探している。



このはな つばき

此花 椿

桜の姉。両刀遣いで淫乱。某有力会社の社長秘書として一応働いているらしい……。

第一章	お嬢様登場！
第二章	お姉様参上！
第三章	奥様襲来！
第四章	お嬢様の挑戦！
第五章	お嬢様の初体験！
第六章	おしかけ家族！

「うむ、分かっておる」

喜色満面で頷いたお嬢様は、なにかを思いついたらしくパツと顔を上げた。

「ついでだ! ふえらちおなるモノを見せよ!」

「ななな、なにが『ついで』ですかッ!? ……つて、しよ、祥子さん? 冗談でしょう冗談ですよ、なにが『ついで』ですかッ!? ……つて、しよ、祥子さん? 冗談でしょう冗談ですよ、なにが『ついで』ですかッ!?」

ジタバタもがく由仁の前で、ペニスから一旦手を離れたメイドが少し退き、絨毯に三つ指をつけて深々と頭を下げた。

「ふつつかながら、御奉仕させていただきます」

しつとりと落ち着いた、艶やかな口調。

正座して頭を下げているため、紺色の襟から伸びる白いうなじがよく見えた。ほっそりとして艶めかしい、若い牝のうなじだ。

——ミチチ、メキキッ!

支えるモノを失った淫棒が、鋼のように硬くなる。燃え出しそうなくらい紅くなる龟头、雄々しく張り出すエラ——肉棹は太さと長さを増して、

「お、おとお…:ペにすとは、こんなに大きくなるモノなのか!?!」

すぐ間近から覗き込んでいる桜お嬢様を悦ばせてしまった。

しかも、好奇心旺盛なお嬢様は、ただ見ているだけでは満足できないらしい。傍らに跪いてやや位置を変え、由仁の尻のうしろから股間へ手を潜らせて、陰囊を握り直す。

太腿に擦りつけられる柔らかな頬、しなやかな髪——天使のような美少女が、裸の下半身にしがみつきの、頬擦りしてきたのだ。童貞の由仁にとってはそれだけでも昇天してしまいそうな快感なのに、

「ああダメ、ダメダメ、祥子、さああああんッ！」

いきり勃つ淫棒に、切れ長の瞳を妖しく細めた美人メイドがソツと顔を寄せ——。

ちゅっ！

敏感な亀頭の先端に、キスされてしまった。

柔らかくて温かくてプニプニした、絶妙な感触。

勃起ペニスの芯に凄まじい電気が逆流し、メイドたちに絡みつかれた身体が弾けるように振り返った。

ビュン！

揺れた逸物が祥子の頬を掠め、美しい横顔を軽く打つ。

「あ、ああ、ごっこ、ごめんなさ……いいッ！」

汚いモノをぶつけてしまった、と謝つたのに、足元に跪いたメイドは逆に、うっとりと目を細めて自分から頬を擦り寄せてきた。

「ふにゃ!! はにゃ……あうう!!」

スペースとしてほんのり温かな、白い柔肌。

亀頭をくすぐる解れ髪、裏筋に吹きかかる生温かな吐息。

偶然を装って肉茎に触れる唇、焦らすように掠める濡れた舌――。

どれもこれも初体験。蕩けるような心地よさ。おぞましい淫棒に夢中で戯れている美女の姿も、由仁の劣情を強く強く掻き立てる。

「……なにやらいやらしいぞ、祥子」

由仁のタマタマを手の中で転がしつつ、頬を赤らめたお嬢様が訊いた。

「まさか、私に内緒で、父上とそんなことをしていたのではあるまいな？」

「いえ、決してそのようなことは……」

答えるメイドは、なおもペニスに頬擦りし続ける。

「お嬢様のお手本になればと思ひまして、ビデオなどで自習を――また、椿つばきお嬢様にも特別な御指導をしていただきました。直接舐めたり吸ったりせずとも、このように頬擦りするだけでも殿方はたいへんお悦びになるのだとか」

「おお、姉上直伝の技か！ ほかにはどんなモノがあるのだ？ 見せてみよ！」

「では――」

由仁の股間で頭を下げたメイドが、赤黒く照り光っている淫棒の下へ潜り込み、広げた舌を長く伸ばして――れちよっ！

「うぁおッ!!」

強張った裏筋を舐め上げられ、ビクツと腰を退く由仁。

痛かったわけではなく、気持ち悪かったのでもない。

あまりにも気持ちよくて、いきなり果てそうになってしまったのだ。

ぬちよ、れちよ、にゅちゅ——敏感な肉棹を、茹だったナメクジのような感觸が這い回る。生温かな唾液を塗りつけられた場所が、たちまち甘く痺れて蕩けていく。プリプリした舌先も気持ちいい。ザラザラした味蕾も心地よい。裏筋や亀頭に微かな鼻息を吹きかけられると淫棒の芯に熱いモノが膨れあがり、舌や唇よりも硬い鼻が擦れればいきり勃つ男根全体に微弱電流が駆け巡る。

しかも、幼気なお嬢様の小さな手にキンタマをモミモミされながらだ。強制された快感に全身の血が煮え滾り、舐られ弄られている股間へ怒濤のように押し寄せてきた。

「だ、だめだめ……祥子さん、ダメツ！ オチンチンですよ、汚いですよ、や、や……あふっ!! あ……そ、そんな……はう、ああうっ!」

舐められるたび硬くなり、揉まれるたびに筒先が疼く。芯に熱い溶岩が渦巻いて、いまにもビュクビュク噴き出してしまおうだ。

童顔を赤く染め、上擦った吐息をこぼす由仁を、その腰にしがみついた祥子は上目遣いに観察する。首を捻って角度を変え、裏筋を、側面を、つけ根からカリ首まで何度も何度もねちよ、ぴちよ、れちゅ——そそり勃つ淫棒に、自ら顔を擦りつけるような動き。伸び上がるたびメイド服の胸が重々しく弾み、首の角度を変えるたび紺色のスカートに包まれた形よい尻が牡を誘うように左右に揺れる。

見るヒトが見ればコツを掴んでいない単調な舌遣いと気づいたろうが、されている由

仁は童貞で、見物しているお嬢様は処女だった。

「ぬう……そんなに舐めてよいのか？ オチンチンがベチョベチョではないか」

「やああ、めええ……てええつ！ ダメ、もうダメ……出ちやい、ますう！」

どちらも昂奮の極みに達し、幼顔をホオズキのように赤らめている。

「まずはこのように——れちよ、にちよ——唾液をまんべんなく塗すのだそうです——ンちゆ、ちよ——初めての性交をするときもこうしてベチョベチョにしておけば——れちゆ、ンちよ——摩擦が低減されて、あまり痛みを感じないのだとか」

相変わらず静かな口調で、祥子が説明する。

だが、白かった頬にはうつすらと、艶めかしい朱が差していた。長い睫の下、切れ長の瞳が煙るように潤んでいる。いつも無表情に引き締められている唇がいまはずかに開き、妖しく微かな吐息をこぼしていた。

いつも冷静なメイドでも、その肉体は牝。

しかもこの館は男つ気をすべて排した、異常な結界。

その中に紛れ込んだ幼気な青年が、どのような目で見られるか——。

（ひよ、ひよつとして……とんでもないとこに来ちゃったんじゃ……ああッ!!）

見回すと、周りのメイドたちも頬を赤らめ、祥子と同じように目を輝かせていた。無意識に胸を押さえたり、スカートの前を押さえたりしている。

（だ……ダメだ、逃げなきゃ……）

いまさら思っても、もう遅い。

祥子の唾液にまみれたペニスは痛いほどに強張って、ねっちより濡れた亀頭は弾けんばかりに怒張している。筒先が鼻息にくすぐられると心地よい電流が淫茎を駆け抜け、揺れた切っ先が祥子の頬や耳朶に擦れれば、

「はうんッ！」

思わず声が漏れるほどの快感が炸裂する。

勃起ペニスはずつしり重く、湧き上がる肉悦に腰が抜けかけていた。

膝が震え、立っていることすら難しい——と。

由仁の腰に抱きつくような姿勢で陰囊を弄んでいた桜が、

「し、しかし……オチンチンを舐めるといのは、やはり、ちよつと、な……」

イヤそうに顔を歪めた。性の知識は穴だらけだが、男根が小便をする器官だということは知っているらしい。

チャンスだ。なにも知らないお嬢様にペニスの汚らわしさをアピールすれば、これ以上おかしなことはされずに済む——と思っただのだが。

由仁が口を開くより先に、祥子がふわっと笑みを浮かべた。

「大丈夫です、お嬢様。オチンチンはたいへん美味しゅうございます」

「なにっ!? ホントかッ!？」

「ううう、嘘ですよ嘘ッ！ オチンチンが美味しいわけな……いヒっ!？」

あもっ！

言いきる前に、大きな口を開けた祥子に男根をパッキリ啜え込まれてしまった。

「はにやつ?! にや、にや、にやはああ……」

一瞬強張った由仁の表情が、すぐにデレッツと崩れた。

亀頭を包み込んだ口腔の、生温かなぬめり。

カリ首に絡みつく、しなやかな舌。

淫茎を締めつけてくる柔らかな唇も気持ちいい。美女の口に半ばまで頬張られた男根をジューチュツと音が立つほど吸われると、鈴口からつけ根へ針のような快感が突き抜ける。

(だ、め……みんなが、見てる……みんなに、見られて、る、の……に……い……!)

メイドたちの視線が気になるのに、不器用にくねる舌に肉冠をねちよ、ぴちや、と舐られると心地よい波紋が全身に響き渡る。ちゅうう、ちゅぢゅううううと吸い立てられれば、湧き上がる悦びに意識も理性も吹き飛びそうになる。

「なんと……ふえらちおというのは、こんなに悦ばれるのか……」

目を丸くして見入るお嬢様に応えるように、

「ムあ……オ」

祥子は広げた舌を淫茎の下へ添わせ、縁を上げて裏筋を包み込むようにした。首を伸ばし、身体全体をゆっくり前後に揺らして――。

ぬ、くぼっ！ ぬぼもっ！

「ふあ……ッ!! ああ、うう、くううっ!!」

跪いたメイドが揺れるたび、由仁の亀頭がプリプリしてヌルヌルした肉の関門を出入りする。太さよりも長さの目立つ淫棒が咽喉蓋を貫いて、祥子の喉を犯し始めたらしい。

口腔より狭い粘膜の穴に、感じやすい肉冠がぬっぽ、ぬっぽ!

初めは尖端だけだったのにやがてエラまで、さらにはカリ首まで、狭い喉と広い口の間を行き来するようになる。

「お、お、オチンチンが、どんどん、奥まで、入っていく……」

由仁の腰にしがみついたお嬢様が、淫棒を呑み込んでいく祥子の口元をジッと見つめたまま、譫言のように呟いた。尻側から回した手で陰囊を無意識にコリコリ揉みつつ、

「こんなに深くまで受け入れたら、苦しいのではないのか?」

綺麗にまとめた黒髪が崩れそうなくらい激しく動いているメイドに訊く。

だが、うつとり目を細めた祥子は応えない。能面のように無表情だった頬をほんのり赤らめ、いやらしく弛めて、じゅちゅっ!　じゅちゅっ!　と卑猥な音を立てるだけ。

「ぬうう、祥子がこんな顔になるとは……なるほど、確かにヒトには見せられぬな」
性行為を秘めごととする理由を納得し、真面目な表情で頷く桜お嬢様。

その間も、一匹の牝と化したメイドはパツクリ啜えた男根を無我夢中でしゃぶっていた。咳き込まずに奥まで導き入れるコツを掴んだらしく、

ぬぼぼ!　ぬくちゅ、ぬぼぼっ!



硬い亀頭を喉の半ばまで導き入れ、乳房が躍り回るほど激しく身体を前後に揺らす。

「にやう、ああ、ンおお……ッ！」

次から次へと炸裂する強烈な吸引感に、身を振っておかしな声を上げる由仁。

咽喉蓋の締めつけは唇より強く、細い食道の粘膜は口腔より熱くネチャネチャしている。裏筋に貼りついた舌も気持ちイイ。ザラザラした味蕾が唾液に濡れて、まるで石鹼水にぬめる天鵞絨ビロイドのよう。

「や、やめふえ……やめふえええつ！」

延々と続く悦びに舌が縛れ、呂律が回らなくなってきた。

メイドたちに羽交い締めにされた身体が振れる。白く輝く細い脚が小さな膝小僧を内側に向けて、雨に濡れた小鳥のようにか弱くプルプルカクカク。

獲物の昂りを感じ取ったのか、祥子が由仁の腰を掴み直した。

白い首を伸ばし、喉を弛めて——ぬぶぽぽぽ！　じゅちゅぬぽぽ！

いきり勃つ男根を熱烈にもてなす。

捻れた淫茎が抜け出てくるたび紅い唇が捲れ、細かく泡立った唾液が掻き出された。祥子の細い顎から糸を引いて垂れた涎は振り子のように大きく揺れて、ゆさゆさ弾む胸の膨らみにも生臭い滴が点々と飛び散る。

「れちやうれちやう、しよんなことしゃれたら、ボク、ボク……れちやうううつ！」

「出る？　ナニが出るのだ？　……あ、分かった！　精液だな!!」

ビクンビクンと痙攣し始めた由仁の腰に頬擦りしながら、桜がはしゃいだ声を上げる。
「遠慮することはない、見せよ！」

「やあ、やあああ……みない、れええ……ッ！」

叫んでいる間に、メイドの熱い喉に搾られた亀頭がますます強張り、鈴口がこらえがたく疼き始めた。舌にしごかれていた裏筋が甘く痺れ、狭い咽喉蓋にキュツキュツと締めつけられたカリ首がウズウズして——肉茎の芯に、煮え滾った溶岩が充滿する。

「涎まで垂らしてよがっているのに、いまさらなにを恥ずかしがっておるのだ？」

意地悪く笑ったお嬢様が、手の中のタマタマを——コリッ！

「にやえああ——ッ！ ふあ、あう……う、く、ううう……ッ！」

少女に握られた陰囊から美女の喉奥を抉っている亀頭まで、悦びの突風が駆け抜けた。

ペニスの中で精液が滾る。

肉棒がミチチ、メキキ！ と怒張して、肉冠がさらに硬く、いっそう熱く——。

「りや、りや……りやええええ！ りやえりやえ、れちやうれちやう、れちやうううつ！
もうらめ、らめらめええつ！ が、がまん、れき、にやいいい——ッ！」

ビュクツ！

ドピユピユツ！ ドピユツ！

男根を震わせ、祥子の喉奥へ勢いよく迸る白濁液。

「にやふうう——ッ！」

小気味よく弾みながらこぼれ出す、たわわな乳果。

揺れる双球の頂点に、シャツの布地を突き上げていた乳首が鮮やかに紅い。

ムニムニと擦れ合っていた乳谷はほんのりピンク色に上気して、香る汗を薄く滲ませ、なにやらいやらしくぬめり光っていた。

(み、見ちゃ、ダメだッ!)

頭ではそう思ったのに、乳白色の双球から目が離せない。

ぶるんぶるん、ゆさんゆさん——黒いシャツから解放された肉釣り鐘は自由を謳歌するように跳ね回り、若い牡の肉欲をこれでもかと言わんばかりに掻き立てる。

「ぬっ?! な、なんだ、藪から棒に乳など出しおって……」

ポツと頬を赤らめた桜が眉間に可愛い皺を寄せ、自分の乳房を隠すように腕組みした。自分の胸が小さいことを気に病んでいるのか。

「いまだに食べ物が好き嫌いで、祥子たちを困らせているんですってね。そんなことではいつまで経っても、こういうことはできないわよ」

幼い反応を示した妹に意地悪く微笑みかけ、M字に開いた由仁の脚の間にゆっくり跪く椿。プルンプルンと弾む乳房に掌を添え、揺すり上げるようにして——ムニムツ!

青筋を浮かべていきり勃っている肉棒を、柔肉の谷間に挟み込んだ。

「にやうううっ?! ぱぱぱ、ぱい、ぱい……パイズリいつ?!」

柔らかい、温かい。

スベスベでプニプニの——若い女性のオッパイ。

あと少しで果てそうになっていた由仁は、初めて知った乳房の温かくてしっとりとした心地よさに目を回し、掠れた悲鳴を上げた。

汚いハズの男根が美女の胸に埋もれている——その情景を見下ろすだけで全身の血が沸騰。汗ばむ柔肌が亀頭や肉棹にヒタツと吸いつき、どこまでも沈み込むほど柔らかな弾力に淫棒全体が包み込まれて、蕩けるほどに気持ちイイ。

「どう? イイでしょう?」

薄く笑った椿が、眼鏡の下で碧い瞳を上目遣いにして訊いてきた。

その声が乳房に反響し、心地よい震動となって、由仁の男根に襲いかかってくる。

「は、は、はヒいっ! イイです、イイですうう! だ、だからちよつと、やめて……お願い……ああダメ、ダメダメ、椿様ああっ!」

掠れて裏返った哀願は無視され——むぎゅっ! むぎゅっ!

淫棒を挟んだ柔らかな双球が、上下に動き左右に揺れる。瑞々しい乳肌に亀頭がしごかれ、痺れるような快感が湧き起こった。

「おわっ!? ああ……だ、め、えええええっ! 出ちやいます出ちやいます、そんなことされたら、ボク、ボク……くううっ!」

「出したらダメよ、ユニ。私の顔にかけたりしたら、許さないんだから」

ムキユ、キユ、ムキユ——己の乳房を揉み回しつつ上目遣いに笑いかけた椿が、口を開

き、舌を長く垂らした。尖った先に唾液の滴が膨らみ、ツウツと垂れて――。

「はにやうっ!？」

深い乳谷からほんの少しだけ顔を覗かせていた真つ赤なプラムに、ポタリ、ポタリ。

「や、え、ああ……ッ！」

溶けた蠟のような熱いぬめりが、亀頭をゆっくり垂れ下る。

それだけでもイッてしまいそうなのに――ぬちよ、にちゅ!

柔らかくて温かな乳肌を濡らし、淫茎に絡みついて、ニユリユニユリユ滑る。

「どう？　ますます気持ちイイでしょう？」

「い、い、いい、れしゅうっ！」

叫ぶ由仁の声が、舌足らずになった。

もうダメだ、もう限界だ。

煮え立つ溶岩が鈴口に迫り、いまにも噴き出しそうになっている。

射精を必死にこらえているせいなのか、肉棒全体が熱く痺れる。

「やめ、らめ……ゆるし、てええっ！　おねがいにしゅ、椿、しゃまああっ！」

「だーめ！　まだ出しちゃダメよ」

「しよ、しよんなああっ！」

プルプル震える由仁には構わずに、椿は桜を呼んだ。

「口の中に唾液を溜めて。アナタもほら、ここに垂らして」

「い、いいのか? では……」

幼い顔を真っ赤に染めた桜お嬢様が、野苺のような唇を閉じ、なにかを囁んでいるかのよう口をモグモグ。

(あ……ああ、いけない……ッ!)

幼気な唇が蠢く様子に、由仁のペニスがビクン! と反応した。

あの唇に擦りつけてみたい、あの柔らかそうな頬とこの温かな乳房とどちらが気持ちイイのか確かめてみたい——と、ヘンタイチックなことを考えてしまったのだ。

顔を背けて目を瞑り、いやらしい欲求を頭の中から閉め出そうとしたのに——。

ムニユツ!

肘掛けに引っかけられた由仁の脚に、瑞々しい弾力が押しつけられた。

「ふえっ!? はにや、にやあああっ!?」

それは薄紅色のドレスに包まれた、桜のあどけない乳房。

過剰なフリルで目立たないが、そこはそれ、一応大人の女性だ。思った以上にポリユームがあり、形も意外とよいらしい。

(お嬢様の、オッパイ、オッパイ、オッパイ……ッ!)

あわあわと赤面する由仁には気づかぬように、グウツと首を伸ばした桜が、

「ンあ」

と口を開いた。

ねろくん——いやらしく糸を引く涎が大量に、椿の乳谷へ降り注ぐ。

「ひっ!! ひ、ひいっ!!」

お嬢様の唾液を亀頭に浴び、弾ける悦びに反り返る由仁。

椿のモノよりずっと熱く、さらに淫らにぬめっていた。細かく泡立っているからなのか、乳肌と淫棒の間に垂れてくるとプチプチ弾けて新たな快感が炸裂する。

「オチンチンは繊細だから、とにかくヌルヌルにしてあげるの。ローションでもいいのだけれど、舐めるときには自分の唾液やエッチなお汁のほうが効果的ね」

妹の涎が乳肌に馴染むのを待ちながら、いやらしく目を細めた椿が解説する。

「ぬう? なぜだ?」

「そのほうが動物的で、よりエッチだからよ。自分のヌルヌルで悦ばせてあげると、男のコはその女のコのことを、本能のレベルで大好きになっちゃうの」

「よ、よく分からぬが……ならば、やめろ! ユニは私の家庭教師だぞ! 姉上の手はこれ以上借りぬ、早く離れるッ!!」

焼き餅を焼いたのか、独占欲がもたげてきたのか——ともかくプクツと頬を膨らませた横顔があどけなくて可愛いが、由仁はもう、それに気づく余裕すらなくなっていた。

(出ちやう……出ちやうううッ!)

鈴口のすぐ裏側まで迫り上がってきた精液を、必死になつて堰き止めている。ツルンとした額に脂汗を浮かせ、唇を噛んでピクピク、プルプル。息を大きく吐くとそれだけで射

精してしまいそうな気がして、ふう、はあ、呼吸すら押し殺す。

「バカねえ。だからアナタにも唾を出させたのよ。これで気持ちよくしてあげたら、ユニは私とアナタのことを大好きになるわよ——さて、そろそろかしら」

温かな唾液が肉茎と乳肌にとっぷり染みついたことを確認し、椿がパイズリを再開した。
ぬっちや！　ぬっちゆ！　むっきゅ！

いやらしくぬめる双球に怒張ペニスを揉みまくられ、

「にや、にや……ふにやあああつ！」

舌っ足らずな鳴き声をこぼす由仁。

左右から貼りついた大きな舌に、執拗に舐めまくられているような——歯のない口に啞え込まれ、何度も何度も甘噛みされているような——。

「らめ、らめ、らめえええつ！　れちやうれちやう、れちやいま、しゅうううつ！」

柔らかく歪んで揺れまくる乳白色の肉果の狭間で、淫棒がムクムクと膨れあがった。

亀頭が疼く。尖端がムズムズする。

「あはは！　ユニのオチンチン、すごく硬い！　すごく熱い！」

笑った椿が、乳房の左右に添えた両手に力を込めた。

むっぎゅううつ！

肉棒にかかる圧力が増す。

「ふひいいつ!!　れちやいますれちやうんれしゅ、ゆるしちえ、ゆりゆしちえええつ！」

「ダメダメ！ 男のコでしよ、我慢しなさい！」

「しよ、しよんなああつ！」

涙をこぼし、ピクピク震える由仁。

わななく唇から涎が溢れ、鼻水も垂れた。

淫棒が熱い。燃え出しそうだ。

「出したらおしおきよ、いいわね？」

「あうつ!? あひ、あひいいつ!?」

ぬち、むぎゆち、にゆ、にゆ、にゆにゆにゆ！

椿の両手に寄せ合わされた乳房が、爆発寸前の男根を挟んで激しく上下。

怒張した淫肉が、温かくて柔らかくてスベスベした柔肌にしごかれ揉まれ捏ね回される。

谷間を濡らした美女と美少女の唾液が快感に痺れ始めた肉棒にニユリユニユリユニユリユリ、亀頭のエラにくちゆくちゆくちゆり。

「や、や、やあッ！ もうらめ、らめらめ……ちゅばき、しゃまああつ！」

乳肉の弾力も気持ちイイが、それ以上に涎のぬめりが気持ちイイ。つけ根から迫り上がってきた熱い溶岩が筒先まで充滿、真っ赤な肉冠がルビーのように硬くなる。

（無理……無理無理、絶対に無理いいッ！）

これ以上我慢するのは不可能、もう出る、あと少しで出てしまう——のに。

「聞きわけのないコね。ダメと言ったらダメ！ 女王様の命令よ!!」

縁なし眼鏡の下で上目遣いに笑った椿が、豊満な乳房を揺すり上げつつ首を曲げ、紅い舌を長く伸ばした。狙うはもちろん、乳谷からわずかに突き出た紅い亀頭。

——ぴちよっ！ べちやっ！

「あにやはあああ——ッ!？」

舐めさせられた鈴口に激感が炸裂。

悦びの荒波に頭が蕩け、視界が急速に狭まって——。

「う、あ……あひいいつ!! れ、れ、れるれる、れちやああ、ああああ——ッ!」

びゅくっ! びゆるるっ! びゅくく、どびゅびゅっ!

メイド服を纏った幼気な美少女風美青年の股間から、白く濁った溶岩が勢いよく迸った。

青臭い尾を引いた滴が、椿の顎や喉、額や眼鏡に、べちや! びちや! ねちよ!

「ううう、あああ……おとお……」

熱い塊がペニスを震わせて噴き出すたび、快感が閃いて魂が蒸発していく。

ビュクツと噴くたび意識が遠退き、理性が溶ける。漂いのぼる青臭さに頭の芯が痺れ、頭の中が真っ白に塗り潰されていく。

ビュククツ!! どびゅっ! どびゅっ! どびゅ、どぶ……永遠に続くかと思われた奔流も次第に力を失い、飛び立てなくなり、やがて鈴口からトロトロ垂れるだけになった。

(あ……あ、ああああ……出ちやっ……た……)

射精絶頂の余韻に蕩けきった頭で、由仁はぼんやり思う。

だつてしようがないじゃないか、柔らかくて温かくてヌルヌルしたオツパイで、オチンチンをあんなにムニムニされたら——ボクはやめてつて言つたんだ、もう出ちゃうつてちやんと言つた——なのに椿様が、意地悪な椿様が……。

「ゆゝに〜ちや〜ん〜」

「ふあ……？ うわっ!!」

笑いを含んだ声に呼ばれてハツと我に返ると、すぐ目の前に椿の顔が寄せられていた。

秀でた額から美しい眉にかけて、白い粘液がべつとりと粘ついている。碧い瞳を飾る緑なし眼鏡にも、高い鼻梁にも、妖しく微笑んでいる紅い唇にも——青白い滴が点々と飛び散つて、青臭い匂いを発していた。

「私、我慢しなさいと言つたわよね？」

ぼよよん、と揺れる乳房を突き出し、椿が獣の笑みを深める。

たわわな胸果はほんのり桜色に火照り、美しい丸みの先にはグミの实のような乳首がプクツと痼り勃つていた。それだけでも、女性経験の少ない由仁には十二分すぎるくらい刺激的なのだが——。

（わ、わ……うわあ……ッ!!）

淡く翳つた乳谷に、べつちよりと垂れている白濁液。

青白く輝く牡エキスは、まるで練乳の缶をぶちまけたように大量に粘ついていた。

しかもそれは、自分のペニスからビュクビュク噴き出した精液——美女の柔肌を汚して



しまった、と真面目で純朴な由仁が罪悪感に捕らわれるのを待っていたかのように、「まだ出しちゃダメ、顔にかけたらダメって……私は確かに、そう命じたわよね？」
穢れた乳房をタプタプ揺らして、椿が凄む。

「は……はひ！ で、ででで、でもでも……あ、あんなに、気持ち、よかつたら……」
「あら、そう、ふうん？ メイド服が似合う浅ましいM男の分際で、女王様のオツパイを偉そうに批評してくれちゃうわけ？」

鼻と鼻が擦れそうなくらいの距離で、艶めかしく紅い唇がニイツと吊り上がった。

（うわぁ……ッ！）

怖い——と心臓が縮み上がる一方で、ペニスが乳肌の感触を思い出す。

柔らかくて温かくてスベスベして、唾液にぬめれば滑らかで——心地よい圧力、吸いついてくるような感触、瑞々しい弾力——。

「おおっ!!」

と、どこかで桜が驚きの声を上げた。

不意に椿が横へ退き——大きく開いた由仁の膝の間に、目を丸くしたお嬢様がチョココンとしやがみ込んでるのが見える。

「な、な……なにしてるんですかっ!!」

「決まっておろう。オチンチンを観察しておったのだ」

得意げに言う美少女の視線の先には、真っ赤な亀頭を振り立てて元気よく起き上がった

赤黒いペニス。椿と桜が垂らした唾液が淫棒全体に絡みつき、ヌメヌメ光り輝いている。鈴口から亀頭にかけては白濁液も垂れていて、見るからにいやらしく禍々しい。

——が、桜はペニスのおぞましさに驚いたのではない。

「姉上が脅したら、途端に大きくなりおつた!」

薄紅色のドレスがよく似合うピスクドールのようなお嬢様は、あどけない頬に天使の微笑みを浮かべ、まっすぐ伸ばした人差し指で由仁を指して、

「お前、ヘンタイ!!」

愉しげに宣告。

「ええっ!? ちちち、違いますよおつ!」

反射的に叫んだのに、男根はムククツとさらに勃起してしまった。生まれつきだったのか、それともいま産みつけられたのか——いずれにしろ、M気が芽生えたのは確かだ。

「お退きなさい、桜。ユニの調教はこれからが本番よ」

完全に主導権を掌握した椿が薄く笑い、その周りでメイドたちがいそいそと、エプロンドレスの前掛けを降ろす。紺色のブラウスが次々にはだけられ——ぼろん、ぶるるん! とこぼれ出す、いくつもの乳房。

「う、わ……あああつ!」

前にも横にも、オッパイ、オッパイ、オッパイ——目のやり場に困って顔を背けても、そこにもまた、大きさや形が微妙に異なる美乳が弾んでいる。

うう、くうう……ンううつ！ ダメ、もつと……そ、そう……そこ、そこ……あぁッ！」

次第に切迫してくる牝たちの声も、イイ。

白い柔肌を重ねた楓と椿は肉の悦びに酔っているのか、豊富な乳房をムキュツムキュツとしきりに摺り合わせていた。掌を重ねて五本の指を絡め合い、潤んだ視線を交わし、喘ぐ唇を啄んで互いの舌を舐め始める。

乱れる金髪、汗ばむ黒髪、歪む乳房、くねる腰——由仁の剛直に肉壺を掻き回されるだけでは飽きたらず、乳首やクリトリスも摺り合わせて、閃く悦びを愉しんでいるのだ。

「母上も、姉上も……いやらしいな。見ているこつちまでおかしくなってくるぞ」

耳の先まで真っ赤になつてモジモジし始めた桜が、甘い溜め息とともに呟く。

「そ……の通り、で……ごさい、ますね……」

いつも冷静なメイドも、立ち込める淫気に当てられたらしい。湯当たりしたように頬を赤らめ、抑えた呼吸を乱している。白い手が意味もなくエプロンドレスを握り締め、形よく膨らんだ胸元を躊躇いがちにまさぐっている。

そんなふたりの様子を気にする余裕も失つて——。

「お、奥様ああ……椿様ああッ！ ぼ、ボク……もう、もう、もおおううつ!!」

ムツチリとした椿の尻に指を喰い込ませ、しきりに腰を振りながら掠れた声を張り上げる由仁。ふたつの熱い淫穴を掻き回していたペニスには快感電流が渦巻いて、いまにも爆発してしまいそうだ。

(も、もうダメ！ これ以上は、もう、本当に……くううっ！)

——と。

「ふ……藤原、様あ」

「ソウ？ ……うわっ!? ななな、なにしてるんですか、祥子さんッ!?」

自分に向けられた桃尻に気づき、由仁は思わず正気に戻った。いつも冷やかな顔をしている祥子が紺色のロングスカートを大胆に捲り上げ、四つん這いになって、ほんのり赤らんだ美尻を揺らしていたのだ。

白く瑞々しい太腿を締めつけているのは古風なガーターストッキング、腰に巻きついてるのは三角の吊り布を垂らした黒いガーターベルト。妖しいレース模様で縁取られたそれらの狭間に、桜色に火照った尻肌が眩しいほどに輝いている。

(う、わあ……!?)

由仁の目を惹きつけたのは柔らかな肉の谷間にキュツと窄まっている紅い菊蕾と、そのすぐ下で淫らに熟し、甘酸っぱい果汁を滴らせている肉アケビ。

「ちよ、待つ……ええっ!？」

息を呑んで見つめていると、ハの字に開いた太腿の間から白魚のような細指がニユツと迫り出してきた。艶やかな爪を光らせて軽く曲がった指先が、ぽってりとした肉畝を掻き分けて潤みの中に潜り込み——にちよ、ぬちゅ!

縁に滴を垂らしてはみ出した真つ赤な肉ビラが、白い細指に抓まれ、しごかれ、いやら

しい音を立てる。

「は、はしたないメイドだと、どうかお笑い、ください……でも、もう、私、私……うう、くうう……我慢でき、な、いいいっ！」

秘裂に指を突っ込んだまま、祥子が美尻をクンツ！と振った。

本当に我慢できないらしく、そのままカクンカクンと空腰を打ち始める。

「どどど、どうしちゃったんですか、祥子さんッ!!」

目のやり場に困ってしどろもどろとなる由仁から、

「久々のオチンチンだからって、ちよつとはしやぎ過ぎちゃったかしら。ゴメンね祥子」

「そんなになるまで我慢していたの？ バカねえ、祥子も女のコなんだから、エッチしたいならしたいって言えばいいのよ」

苦笑した楓と椿が離れた。乱れた服はそのままに、解れた髪を軽く搔き上げて——ヒイヒイと泣き始めたメイドの左右に跪く。

「お、奥様……椿、さま……申しわけ、ごいま、せん……順番を待ちきれず、このよう
な、はしたない真似を……はうっ?! あ、あ」

揺れる桃尻にピタ、ペタ、と美女たちの白い手が貼りついた。たおやかな指先が柔肉の弾力を確かめるように軽く揉み込み、もう片方の手は四つん這いになったメイドの胸へと伸びて服の上から乳房をまさぐる。

「いいのよ、祥子。ワガママな桜ちゃんの面倒をよく見てくれたから、これは御褒美」

「ふ、ああつ！」

楓の指が祥子の尻穴に触れ、皺を伸ばすようににゅつにゅつと圧した。

アイコンタクトもしないまま、椿の細指は祥子の秘裂へ伸びて、

「ひよつとして、いままでも桜とユニのエッチをただ見ているだけだったの？ 可哀想に。こんなに濡れてしまうのも仕方ないわよねえ」

ぬちゅん、くちゅん。

細指に掻き回された秘裂が歪み、真つ赤に染まった肉ピラがあられもなくこぼれ出した。蜜が滴り、甘酸っぱい香りが立ち上る。

「ふうう、く……ううんッ！」

祥子の声が切なさを増し、尻を突き出した姿勢のままもどかしそうにくねる。

（うはあ……女のヒトだけの絡みつて、なんだかすごく、エッチだ……）

淡い桜色に輝く美乳を揺らし、艶やかに微笑むふたりの美女。恥ずかしい場所を弄られて媚声をこぼすメイド——耽美で退廃的な光景に、由仁はギチギチ強張っている男根を忘れるほど魅せられてしまった。

肉感的な桃尻を這い回る華奢な女手、繊細な粘膜を優しく爪弾くたおやかな指——祥子の左右からしなだれかかった半裸の美女たちは、もう片方の手でメイドの乳房を優しく揉みつつ、赤く染まった耳朶に唇を寄せてぴちゃ、ぺちよ、と小さな音を立てて舐める。

「あふ……ン……ああんッ！」

痴態を見せびらかすほど焦っていた祥子は張り詰めた琴線のように敏感だった。楓に尻穴を撫でられれば背筋を反らして甘え声を漏らし、椿に秘裂を弄られれば美尻を振って噁り泣きつつ艶やかに媚びる。

（こ、このまま、イかせちゃうのかな？）

独占欲の強い此花家の母娘なら、使用人である祥子を脱落させて由仁を独り占めしようとするかもしれない。体力的には歓迎すべきことなのかもしれないが——いつも冷やややかなほど冷静だった祥子が楓と椿に弄られて恥ずかしそうに鳴いている姿を見ると、胸がキウウツと締めつけられた。

（イケナイよなあ、お淑やかな祥子さんにあんなことしたら……）

などと、罪悪感にも似た気持ちを抱いてぼんやりしていると、

「なにをぼうつとしているの、ユニ！」

祥子の秘裂をぬちゅくちゅと搔き回していた椿が女王様の顔で呼びかけてきた。

「お淑やかな祥子がこんなことまでしておねだりしているのよ？ 男なら男らしく、ちゃんと責任取りなさい!!」

「ええっ!! ぼ、ボクのせいですかあッ!!」

とんだ言いがかりだ。祥子の前で獣のように乱れていたのは楓と椿ではないか——同意を求めてお嬢様に目を向けたのだが、

「お前のせいだ、由仁」

ギロツと睨まれてしまった。

「ど、どうして……あふっ!!」

訊き返そうとした途端小さな手にペニスを握られ、

「コレをこんな硬くしているからだッ！」

シユツシユツとしごかれてしまう。

「女と見ればだれかれとなく無節操に勃起しておつて……恥を知れ、恥を！」

「それはちが……だって奥様や椿様が……あああ、や、や……やああンツ！」

「どうか、祥子が終われば私の番だ！ 早くしろ！」

「あ……そ、そういう理由ですか……ふあっ!! ああダメ、ダメダメ、お嬢様あつ！」

「ダメじゃない！ さっさと犯れ！」

手淫されながら腰を圧された由仁は、閃く悦びに抗うことができず、いやらしく打ち振られていた祥子の桃尻に近づいた。

（うう……ああつ！）

着痩せする質なのか、祥子の尻は思っていたより大きい。肌の白さは此花一族の母娘に負けているが、張りや色艶、瑞々しさやきめ細かさなら勝っているかもしれない。

そのうえ——。

「どうしたの、ユニちゃん？ オバサンにしてくれたように激しく突けばいいのよ」

「ほら、穴を間違えないように、こうしてお尻を開いてあげる」

四つん這いになったメイドの尻に、左右からしなだれかかる楓と椿。その手が柔らかな尻房を搔き分け、いやらしく色づいた秘裂を見せびらかす。

「ココよ、ユニちゃん。分かるでしょう？」

「わ、分かつてますよ、そんなことはッ！ で、でも……い、いいんですか、本当に？」
訊きながらも、由仁は膝立ちになり、祥子の腰を掴んでいた。ウエストはほどよく括れているのに肉づきがよく、手指にしっとりとした脂肪の層を感じる。香汗を滲ませた柔肌は滑らかでいながらモチモチしていて、被せた掌に吸いついてくる。

「い、いいんです……挿入れて、ください……」

肩越しに振り返った祥子が、潤んだ流し目を向けてきた。

（うわぁ……！）

いつも冷やややかな顔をしていた物静かな美女の、切ないほど熱い眼差し。

考えてみれば、この四人の中では祥子とのつき合いが一番長い。二次面接のときの面接官だったし、最初にフェラをしてくれたのも祥子だ。

ワガママを言う桜を静かに論じていた祥子。

上品な手つきで紅茶の準備をしていた祥子。

あまりに冷めた顔をしているから「嫌われているのかな？」と思ったこともあったが、長く接しているうちにそうではないことが分かってきた。祥子が冷やややかに見えるのは、いつも桜を第一に考え、四六時中神経を張り詰めているから。



同じお嬢様に傳く者として、由仁はそんな祥子を尊敬していた。ひとりの女性としてではなく立派な先輩として、眩しいような思いで見つめていた。

なのに、そのメイドが――。

「お願いします、藤原様……どうか、どうか、お慈悲を……！」

涙をこぼすほど欲情し、目の前で白くムチムチした美尻を揺らしている。

(い、いいのか？ 本当に犯っちゃっていいのか!!)

桜に命じられた祥子に無理矢理逆レイプされたことはあるが、そのときといまでは状況が違う。由仁のペニスには祥子の熱さを思い出して早くもギチギチ強張っているが、欲望に命じられるまま挿入するのはまずいような気が――などと、グダグダ思い煩っていると。

「ああん、もうっ！ 意地悪ううっ！」

別人のように子供っぽい声で叫んだ祥子が、瑞々しい太腿の間から手を伸ばし、由仁の淫棒をムギュツと掴んできた。そのまま引つ張られ、淫穴へ導かれて――。

「ちよ、待っ……挿入れます挿入れます、いま挿入れますからああつ！」

硝子細工のように華奢な細指としつとり汗ばんだ掌の感触に、暴発しそうになる由仁。

集団フェラと交互挿入、二度にわたって射精するタイミングを逸していたから、ヌラヌラ光る粘液に濡れた男根は痛いほどに強張っている。射精欲求が一気に膨れあがり、もう、難しいことは考えられない。

(い、いけないような、気は、する、けど……もういい、我慢、できないッ！)

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)

全国書店で
好評
発売中



『当方Mドレイ希望』

魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

不死の吸血姫がDSのご主人様を募集
しているようです
『小説・酒井仁 / 挿絵・にの子』

魔海少女ルルイエ・ルル

『小説・羽沢向 / 挿絵・ピエール☆よしお』

全国書店で
好評
発売中



『魔法の天使ルルイエ・ルル』

地球の未来はルルにおまかせよっ☆

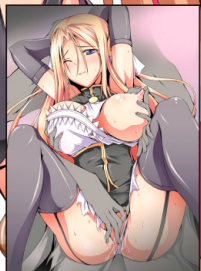
借金お嬢クリス3
令嬢はいかにして42兆円を返済したか?
『小説・筑摩十幸 / 挿絵・了藤誠仁』



全国書店で
好評
発売中

クリス、悪魔堕ち!?

『愛するジグレット様のため、死んでもらいますわっ!』



既刊LINEUP

● 全国書店で好評発売中

● 仙術学園戦 / ノナガリ ①~③

● 青春期なアダム ①~②

● 純麗 / 帝都少女探偵団 赤い迷路を撃て!

● 借金お嬢クリス ①~②

● フリンセスリバーシ! 交錯する美姫と魔姫

● BLANGEL. 輪になって語る悪者の夜

● 無敵の姫騎士がMMに目覚めたようです

● ビルクリムメイデン ①~②

● 呪詛喰らい部 / カースイーター

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利! 来かねる場合がございます。メールの場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!